

2019年 8月27日

私立大学図書館協会
国際図書館協力委員会
委員長 御園 和之 様

2019年度私立大学図書館協会海外認定研修参加報告
ーアメリカの大学・公共図書館の最新事情を探るー

中央大学図書館事務部 閲覧課
西 満美



米国議会図書館内 (Library Of Congress)

目次

1. はじめに	2
2. 研修概要	2
3. 訪問先報告	3
3-1. ワシントンD.C.公共図書館	3
3-2. 2019年ALA 年次総会およびインターナショナル・ライブラリアンズ・レセプション	4
3-3. 北米研究図書館協会	5
3-4. ジョージタウン大学図書館	6
3-5. メリーランド大学図書館	7
3-6. 米国議会図書館	8
3-7. スミソニアン博物館群フリーア・サックラーギャラリー図書館	8
4. 研修を通じて	9
5. 謝辞	9
付録：＜参考文献・資料＞	

1. はじめに

筆者は本学ローライブラリーでの小規模専門図書館に在籍後、現在、中央図書館にて教員や学生の多岐分野に渡るレファレンスに応じつつ、学術情報リテラシーを定着させるための講習実施に勤しんでいる。国内外問わず、学外の図書館員や利用者に接するうちに、図書館界の先行事例やトレンドがどのように変わっているのか、興味を抱くようになっていた。米国図書館事情を効率よく知り、自身の本来業務について再考し、実践的な業務改善を行うことで還元し、図書館のプレゼンス向上に寄与できればと考え、本研修の参加に至った。本書で内容を報告する。

2. 研修概要

研修の概要は、以下の通りである。

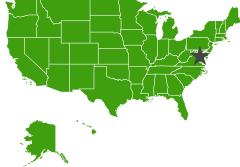
項目	概要	ワシントンD.C.
研修名称	ALA・米国図書館研修 2019 ワシントン 6日間	アメリカ合衆国の首都。唯一の特別行政区。面積174平方キロメートル。人口57万2059、大都市圏人口760万8070（2000）。アメリカの行政・立法・司法が集中しており、最大の雇用主は連邦政府であり就業者の45%を占める。
研修日程	2019年6月22日(土)－6月27日(木) 4泊6日(機内泊除く)	
企画協力	図書館総合展運営委員会、丸善雄松堂株式会社	
旅行企画・実施	株式会社 アイ・ダヴリュー・エイ・ツアー	
訪問国・州	アメリカ合衆国 ワシントンD.C.、メリーランド州	
訪問先	ワシントンD.C.公共図書館、ALA年次総会（ウォルター・E・ワシントン会議場）、北米研究図書館協会、ジョージタウン大学図書館、メリーランド大学図書館、米国議会図書館、スミソニアン博物館群フリーア・サックラーギャラリー図書館	

表2-1.研修概要

本研修は、海外図書館や関連機関を巡るフィールドワーク型の企画である。利用者用の施設見学のみならず、バックヤードツアーや最新のトレンドを踏まえた現地職員との情報交換など、貴重な体験がプログラムの中に組み込まれている。今回は、ワシントンD.C.にて開催されるALA年次総会時期に合わせ、近隣の諸図書館を巡る内容であった。ツアーグループは公共図書館3名、大学図書館4名、学校図書館3名、研究者、関連企業他13名、企画運営スタッフ5名による総勢28名の構成であった（ALA ジャパンセッション参加予定者10名を含む）。

3. 訪問先報告

3-1. ワシントンD.C.公共図書館（ウエストエンド分館）

項目	概要
設立	1896年
図書館数	26館（訪問先:West End 分館）
利用者数	363万人（2018年実績）

表3-1.概要

D.C.エリアの閑静な住宅街に隣接するウエストエンド分館は、数年前まで利用者数が少ない状況にあった。これを打破するため、リノベーションを図り、利用環境の向上が実現し、現在の来館者数は分館・本館合わせた26館の中で5位にランクインしている。利用者層は単身者、若い家族世帯で、公務員が多く居住する地域の人々である。D.C.エリアならではの土地柄か、社会的に安定した生活を営む。日々、あらかじめオンラインで予約した本を、入り口付近に所在する予約本コーナーから取り出し、自動貸出機で貸出をつけ退館するセルフスタイルが一般的で、都会的な忙しい生活での利用のため、滞在時間は極めて少ない。一方、子供たちやシニア層は日常生活の延長線上に図書館があり、シェイクスピア、アート、料理、ITといったテーマのコミュニティが多彩なプログラムを連日開催している。図書館が何より大切にしていること、それは利用者と情報（リソース）との“アクセス”だという。実現することで、利用者自身のキャリアやその家族に利をもたらすことができるからである。この信条をベースにどんな利用者も図書館は受け入れる。障がい者、ホームレス、ホットラインによる非英語圏住民に対応した言語サポートなど利用者とのアクセシビリティの向上に注力していた。小学校との連携も積極的に実施され、子供向けの読み聞かせや夏の読書チャレンジ（アプリで読書履歴を登録し、目標冊数を達成したら地元のメジャーリーグチームの観戦チケットがもらえる催し）など、読書を楽しむしかけが散見された。



写真3-1.外観



写真3-2.予約本コーナー



写真3-3.自動貸出機

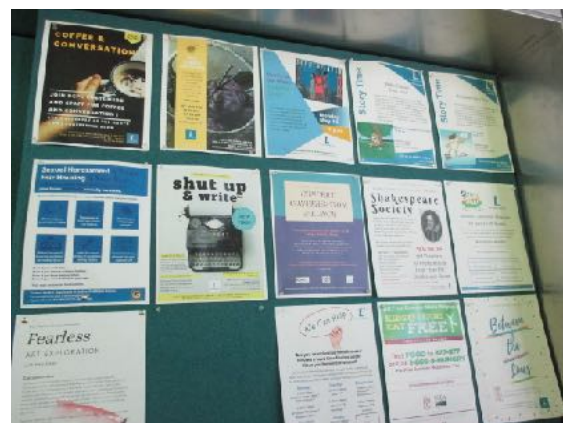


写真3-4.連日企画される様々なコミュニティによる催し



写真3-5.スタイリッシュな閲覧室（パンフレットより）

3-2. 2019年ALA 年次総会およびインターナショナル・ライブラリアンズ・レセプション

項目 ALAおよび2019年次総会概要 (ALA:American Library Association)	
設立	1876年
会員数	約58,000人(2019年現在)
総会名称	138TH ALA Annual Conference&Exhibition
	セッション数:約2,200/展示ブース数:約700
	参加者数 約21,400人
会場	ウォルター・E・ワシントン会議場 など

表3-2.概要

世界で最も古く、最大の図書館協会であるALAは、「すべての人が学びを深め、情報への確実なアクセスを可能にするべく、図書館および情報サービス、職業としての司書の活動の推進や改善を図り、リーダーシップを發揮すること」を使命に発足された。現在は電子時代における図書館の役割転換を伝えるためのキャンペーン、「Libraries Transform」を延長し、重要性をさらに強調したスローガン“Because”を加えた活動など、戦略プランに基づく挑戦が続く。総会では図書館界の新しい試みをプレゼンするセッションや、関連企業の出展ブースが並び新製品の紹介が行われるほか、ポスターセッション、作家のサイン会なども行われていた。筆者にとっては、馴染みのある企業や出版関係者が名を連ねていたため、日頃の利用状況についての情報交換を行った。また、総会最終日の夜に米国議会図書館(LC)にて開催されたインターナショナル・ライブラリアンズ・レセプション(写真3-10)においても、交流を図ることができた。参加したセッションは、以下の3つである。

1.NASA@ My Library: STEM Programming and Strategic Planning

NASAの教育リソースを利用した公共図書館におけるSTEM教育促進のプログラムの紹介。専門機関(Space Science Institute)の図書館支援の1つ実施されているロケット工作の事例を会場で実習し、地域の利用者とNASAリソースの距離を近づける手法を体験した。今後の動向に目が離せない。

2.Going Deskless: Moving from Fort Reference to Point-of-Need Service

カウンター対応ではない、新しいサービスの形について、公共図書館の取り組みを起点とした双方型セッション。限られた人員内で効率的なサービスを行うにはどうしたらいいか考える良い機会になった。



写真3-6.会場全体



写真3-7.リモートロッカー
(ビブリオテカ社製品)

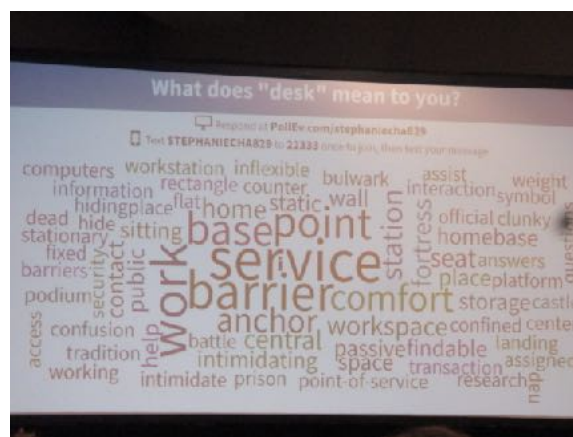


写真3-8.セッションは各スマホから意見を寄せる双方向形式

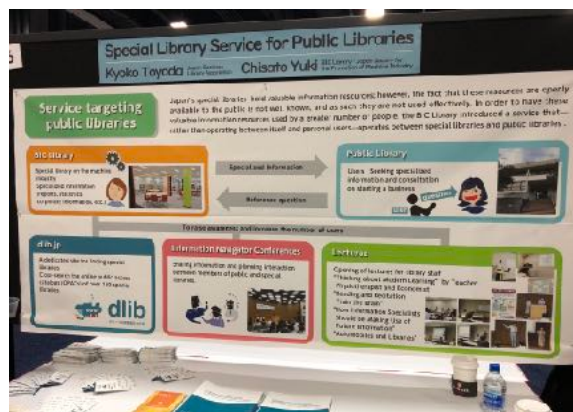


写真3-9.日本からのポスターセッション



写真3-10.インターナショナル・ライブラリアンズ・レセプション(会場:米国議会図書館)

3.Open Infrastructure:A proposal for coherence and interdependence in Community-owned Infrastructure (本研修参加者向け非公式特別フォーラム)

学術機関が保有する多くのリソースを管理するオープンインフラに関わる資金を集めるための仕組み (IOI) について、ノースウエスタン大学のライブラリアン、Weinraub氏による特別セッション。学術機関が自力で組織しインフラを供給するためのオープンソースソフトウェアを開発・運営していくには、スキル・マネジメント・人材・コストなど多くの課題が残る。一方で商用目的で管理・構築しているベンダーとの連携を行い成功したりポジティブの成功事例はあるが、クラウド上の情報セキュリティの管理の点など他国の企業体と連携することを警戒する学術機関もある。昨年秋、世界的な運動「Investing in Open Infrastructure(IOI)」が始動し、受益者（必要とする学術機関）が組織化し資金調達を行うことで、持続可能な複数のオープンインフラと連携するオープンプラットフォームの実現化に向けた取り組みが進む。

3-3. 北米研究図書館協会 (ARL)

項目	概要
設立	1932年
加盟館	124機関 (アメリカ・カナダ)
メンバー	13,000名の図書館員

表3-3.概要

ARLは、アメリカ・カナダの大学図書館および研究機関図書館および公共図書館 (NYPL・BPL) が加盟する研究・学習活動の促進を使命として設置された非営利団体である。各図書館の長が全図書館のメンバーの代表として参加し活動を行なう。多岐にわたる研究テーマ・課題に取り組むなか、手がけるプランを絞り、パートナー組織と連携しながら定期的に先行研究成果を論文形式で公開している。

今年度取り上げられているテーマは、以下である。

1.アドボカシーと公共政策

政府機関との連携、市民や人権、表現の自由、プライバシー、ネットの中立性など

2.多様性、公平性、包括的プログラム

3.学術、助成金の支援

オープンサイエンスの促進など

4.データとその分析

図書館全体を俯瞰したトレンドの分析と現在における図書館の潜在的な課題 (利用者スペース、図書館の存在意義やコレクション、設備が研究者にどう貢献しているかなど) に対応する研究

また、「ARLアカデミー」では、図書館員スキル向上といった人材育成の取り組みが行われている。データ分析結果から、図書館の抱える共通課題として、学術資料費の圧迫、人手不足、専門知識の定着不足などが挙げられており、課題が日本の実情と重なる部分も多く存在する。



写真3-11.デュポン・サークルの一角のビル内の本部



写真3-12.図書館の内のミーティング・ルーム

3-4. ジョージタウン大学図書館

項目	概要
設立	1789年
学部学科	農学、芸術、生物学、教育学、法学、神学、薬学など
所蔵点数	図書：3,115,408冊 雑誌：220,486冊
閲覧席数	1,324 席
図書館	中央図書館を含む9つの専門図書館
端末数	210台

表3-4.概要 統計値は2016-2017年実績

イエズス会のジョン・キャロル大司教によって設立された国内におけるカトリック最古の大学。19世紀までは聖職者、教員のために利用されていた図書館である。中央館に値するMark Launger Libraryを訪ねた。所蔵は徐々に電子ブック・リソースへシフトしており、ユーザー側に提供するプラットフォームも多様化していた。D.C.エリアに在する9つの大学が連携し、互いの機能を持ち寄り、ILLなど、相互連携のあるコンソーシアム（The Washington Research Library Consortium）内において利用をシェアをしている。昨年8月にプリモ（新バージョン）蔵書検索システムへ移行もしており、コンソーシアムを含めた検索もできるものとなっている。研究支援サービスの視点では、各主題のニーズを誰よりもよく知るサブジェクトライブラリアンが話し合いを重ね選書を行い1人1人の研究（現在は約750件の研究をサポート）ニーズにかなった資料を提供する体制が整う。サポートの難しい複数分野の跨がる学際分野については各主題同士でコラボレートし、より発展的なサービスを提供しており、研究大学の発展に大きく寄与していると想像する。新入生に関しては、9月の入学前の週末に図書館の機能やDB利用を周知するため、学生やその親対象のオリエンテーションを実施しており、ゲームなどリラックスした内容も取り入れ、フィードバックも良いそうである。アジア研究のコレクションでは、遠藤周作の手書き原稿を所蔵している。また、メイキングスペース（Maker Hub）や神学図書館も訪問した。



写真3-13.大学のシンボル、ヒーリーホール



写真3-14.中央図書館の入り口



写真3-15.Maker Hub 2016年設置



写真3-16.神学図書館所蔵のユダヤ教の聖書（19世紀頃）

3-5. メリーランド大学図書館

項目	概要
設立	1856年
学部学科	農業、建築、人文科学、社会科学、 ビジネス、コンピュータ、公共政策など
学生数	約41,000人
所蔵点数	図書：465万冊（Eブックを含む） 電子ジャーナル 17,000冊
図書館	中央図書館を含む8つの分館

表3-5.概要 統計は2019年2月28日現在

農業大学として設立した州立大学であり、地域のコミュニティや経済の発展にも貢献しつつ、研究大学としての地位を確実なものとしている。学生ニーズに対応した研究支援法を身につけたスタッフを配置している。キャンパスから10分ほどの距離に図書125万冊とアーカイブボックス4万点を収蔵可能な周密保管庫が設置され、館内の旧書架は徐々にラーニング commons など、利用者スペースにシフトしていった。GIS（地図情報システム）センターでは、地図情報を利用した統計や画像処理の支援体制や、Maker Spaceでは3Dプリンタなど、学生の創造性を育むための設備が揃い、学生や研究者への環境整備は徹底したものであった。

第二次世界大戦後の占領期初期日本において発行された全ての出版物は検閲のため、連合国最高司令官総司令部（GHQ/SCAP）に提出を義務付けられていた。これらがメリーランド大の歴史学の研究者であったゴードンW.ブランゲの所蔵資料となり、コレクションとして保存されている。一部は日本の国立国会図書館との共同事業としてNDLデジタルコレクションで公開されている。出版物のどのような点が検閲対象となったか、またどのように修正され出版されたのか経緯がわかる赤入れの痕跡が残る資料が残っており、当時の日本歴史研究には欠かせない資料であることがよくわかった。また、財政の乏しい戦時中であるため酸性紙の資料が多く損傷が多い様子であるため、今後もデジタル化を推進し、保存に努めていくとのことである。



写真3-17.中央図書館（McKeldin Library）原則館内撮影不可



写真3-18.ゴードンW.ブランゲ文庫（Hornbake Library）



写真3-19.ブランゲ文庫の書庫 法規集の棚



写真3-20.シート状の資料が保管されている箱

3-6. 米国議会図書館

項目	概要
設立	1800年（首都移転時）
従業員数	3,096人
所蔵点数	1億6,829万1,642点（約470言語） 図書・印刷物 約3,960万点 写真 約1,490万点 約地図560万点 原稿 約7250万点 など
来館者数	約190万人
貸出点数	95万8,000点
予算	約6.7億ドル



写真3-21. 閲覧室
（トマス・ジェファーソン館）



写真3-22. アジアンリーディングルームの新刊本コーナー

表3-6. 概要 2018.9.30現在

米国国会議事堂の東側に位置する、議会の調査研究を目的とした所蔵数、予算を含め世界最大規模の図書館。アジア部を訪問した。2019-2023の4大戦略目標である 1.アクセスの拡大 2.サービスの向上 3. リソースの最適化 4. インパクトの評価に向けた取り組みの説明を受けた。この戦略の中で利用者が資料のアクセスできるための仕組みとして、資料のデジタル化へのさらなる推進や、公共図書館へのILLによる支援や障がい者向け資料の貸出など戦略の目的に叶う取り組みが積極的に行われていた。アジア地域（中国・日本・朝鮮半島・モンゴル・南アジア・東南アジア）の資料を収集しているアジア部は100万を超える日本語のコレクションを収集し、館内では日本のデータベースもアクセスできる環境となっていたが、その情報量の多さに驚かされた。

3-7. スミソニアン博物館群フリーア・サックラーギャラリー図書館

項目	概要
設立	1923年
図書館数	21の専門図書館の1つ。
	他には、自然史・アメリカ史・現代美術・宇宙工学など。
所蔵点数	図書：100万冊（半数が日本語・中国語） 主題によって分類
利用対象者	大学生・大学院生・研究者

表3-7概要



写真3-23. フリーア・サックラーギャラリーの集密書庫

スミソニアン図書館は、スミソニアン協会が管理を行う21の専門図書館群で構成されている。その中の古代からのアジアや中東の国の美術資料を展示しているフリーア・サックラーギャラリー図書館を訪ねた。フリーアはアジアの美術について正しい理解をしてほしいという強い意思があり資料を収集していた。日本で開催されている美術展の展示図録が多く所蔵されていた。第二次世界大戦中も変わらず資料を収集できていたため、東京にない資料も一部所蔵があるようだ。予約なしで利用ができること、スミソニアン図書館の中でも珍しい。

4. 研修を通じて

—統計だけでは測れない様々な存在意義がある— スミソニアン図書館のフリーア・サックラーギャラリー図書室の館長の言葉が大変印象に残っている。どの訪問先でも、—図書館が資料を収集し、保存し、利用者が必要な時に資料にアクセスできること— この大変シンプルな目標を図書館員が時代に合わせた変革をしながら、地域の人、所属する学生、国民といった利用対象者のみならず、枠組みを大きく超えて、言語を超え、国を超え、年代も超え、それぞれの人の多様性にも対応しながら、図書館同士のネットワークを活用し、資料へのアクセスの方策を留まることなく、より便利なものへと模索しながら進化してしている動きを肌で感じる事ができた。これは統計の数値ではなかなか測れることが出来ないがかけがえのない重要なものであると同時に、ALAが掲げたスローガン「Libraries Transform」をまさに同じベクトルで体現している様子がうかがえた。米国ではサブジェクトライブラリアンの配置など、専門性により業務の棲み分けが合理的に行われることで図書館が効率的に機能し、図書館が確固たる「知」の拠点として人々に受け入れられ、その知を得ることで人々の幸せに直結している。これは、単にインターネットのサーチエンジンを叩いてアクセスすることだけでは得る事が出来ない知である。今後、AI技術を含めた自動化があらゆる場面で進んでいくと思うが、これは単に図書館員への手助けであり、やはり頼ることができないかけがえのない部分は残ると思う。筆者は、総合大学でのレファレンス業務や情報リテラシー講習の担当として、日々、利用者に接しているが、利用者と資料をより正しく結びつけるため、多くの手法をさらに追求し、「知」に効率よくたどり着けるための手法を絶え間なく学び、還元することに注力していきたい。

5. 謝辞

ALAの年次総会への参加をはじめ、ワシントンD.C.地域に在する公共図書館、大学図書館、議会図書館の施設をめぐり、そのスタッフとの交流の機会を効率よくアレンジメントして下さった企画運営の丸善雄松堂株式会社、図書館総合展運営委員会、IWAツアーの皆さまにこの場をお借りして御礼申し上げたい。また、この研修者募集の機会を与えてくださいました私立大学図書館協会国際図書館協力委員会、研修に派遣させてくださった本学図書館事務部の皆様に感謝の意を述べたいと思う。

以上

付録：＜参考文献・資料＞ ※全URL・データベースへのアクセスは2019年7月31日現在。

- * 1 ツアー概要：<https://www.jaspul.org/collegium/asset/docs/0c5e43f43568254fd960df490ca64d52d2860beb.pdf>
- * 2 「Japan knowledge Lib」データベース
- * 3 『ALA・米国図書館研修2019 訪問先基礎情報』丸善雄松堂提供資料
- * 4 『West End Library 2301 L St. NW』DC Public Library リーフレット
- * 5 DC Public Library ウェブサイト：<https://www.dclibrary.org/>
- * 6 American Library Association ウェブサイト：<http://www.ala.org/aboutala/>
- * 7 ALA 2019 Annual Conference and Exhibition ウェブサイト：<https://2019.alaannual.org/>
- * 8 The Association of Research Libraries (ARL) ウェブサイト：<https://www.arl.org/>
- * 9 Georgetown University Library ウェブサイト <https://www.library.georgetown.edu/>
- * 10 Maryland University Library ウェブサイト <https://www.lib.umd.edu/>
- * 11 Library of Congress ウェブサイト <https://www.loc.gov/>